

ヨハネによる福音書15章1-11節 「イエスに留まる」

1A ぶどうの木、イエス 1-4

1B まことのイスラエル 1

2B 実を結ぶ者への清め 2-3

3B 「留まる」ことによる結実 4

2A ぶどうの枝、弟子たち 5-8

1B 何もできない枝 5

2B 投げ捨てられる枝 6

3B 願いによる結実 7-8

3A 愛に留まる 9-11

1B 父の子への愛 9

2B 戒めにある愛 10

3B 満ち溢れる喜び 11

本文

ヨハネによる福音書 15 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 14 章まで来ましたが、今日は 15 章を一節ずつ見ていきたいと思えます。午前礼拝では前半、1-11 節まで、午後礼拝で 12 節から 27 節までを見ていきます。前半部分、1 節から 11 節の代表的な箇所である 5 節前半を、まず初めにお読みします。「5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。」

イエス様は、学者のように抽象的なことを話す方ではありませんでした。ユダヤ人の生活にあること、一般の人たちの生活の一部にあるものに常に関心を持っておられて、そうした、だれもが知っているところから、ご自分の真理をお語りになられます。14 章で、イエス様は最後の晩餐の席を立たれました。弟子たちに多くを語られ、「14:31 立ちなさい。さあ、ここから行くのです。」と言われます。二階の大広間から出て行かれますが、言い伝えでは、今のシオン山の上にありました。旧市街の南西にあります。そこから、オリーブ山のゲッセマネの園のほうに向かわれます。ゲッセマネに行くのに、神殿の敷地を通過して、ケデロン谷に降りていきます。過越の祭の時なので、大きな門が開いています。そこに、巨大なぶどうの房の形を彫っているところがありました。その門を見ながら、イエス様が、ぶどうの木をお語りになったのだと思えます。イエス様は、弟子たちが、「あなたが行かれる道を知りません。」と言ったら、「わたしが道です。」と言われましたね。そこにある、ぶどうの木をご覧になったら、「わたしがぶどうの木です。」と言われているのです。このぶどうの木を使って、ご自身に留まることを教えられます。

1A ぶどうの木、イエス 1-4

1B まことのイスラエル 1

1 わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫です。

なぜ、神殿の門にぶどうの木が彫られてるか？と言いますと、ぶどうの木はイスラエルの象徴として、神は数多く、ご自分の言葉の中で語っておられたからです。荒野の旅をしていたイスラエルがカデシュ・バルネアから 12 人を偵察に遣わし、約束の地を歩き巡らせたなら、エシュコルの谷で、ぶどうが一房ついた枝を切り取って、二人で棒で担ぎました(民数 13:23)。それだけ巨大なぶどうが取れていたのです。イスラエルの地に豊かさを表し、そしてイスラエルがぶどうの木として表現されるようになりました。

しかしイザヤ書 5 章には、こう書いてあります。「5:1-2 さあ、わたしは歌おう。わが愛する者のために。そのぶどう畑についての、わが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹にぶどう畑を持っていた。彼はそこを掘り起こして、石を除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、その中にぶどうの踏み場まで掘り、ぶどうがなるのを心待ちにしていた。ところが、酸いぶどうができてしまった。」イエス様は、神殿の敷地でユダヤ人宗教指導者と議論をされた時に、ここの預言を取り上げて、主人の息子を殺す農夫たちの喩えを語られました。ぶどうの木からは、良い実ではなく酸いぶどうができてしまいました。良い実とは、ここでは公正や正義です。酸いぶどうとは、流血や悲鳴です。神が農夫として、ここまで手厚く良い実が結ばれるべく世話をしてくられたのに、その結果が流血や悲鳴だったという嘆きです。愛の歌とあるように、こよなく神がイスラエルを愛しておられるのに、このような結果になったという嘆きです。

けれども、ここでイエス様は、「わたしがまことのぶどうの木だ」と言われています。イザヤ 48 章で、メシア、キリストのことが「イスラエル」と呼ばれています。「49:3 あなたはわたしのしもべ。イスラエルよ。わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現す。」主ご自身が、理想のイスラエル、父なる神に対して実を結ばせる、まことのぶどうの木だということです。イエス様は、父なる神と一つであられるがゆえに、父に良い実を結ばせておられますが、今度は弟子たちがイエス様のうちに留まることによって、その実が結ばれるのだということでもあります。父なる神が、私たちを選び、救われた理由は、ただ一つ、実を結ばせるためです。

2B 実を結ぶ者への清め 2-3

2 わたしの枝で実を結ばないものはすべて、父がそれを取り除き、実を結ぶものはすべて、もっと多く実を結ぶように、刈り込みをなさいます。3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことによって、すでにきよいのです。

イエス様がぶどうの木で、弟子たちが枝ではありますが、そこで実を結ばないものは、父が取り除かれると言われます。これは、何度となくイエスご自身が話しておられた、イスカリオテのユダのよ

うな人です。弟子たちの足を洗われた時に、「13:10 水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」と言われました。弟子たちは、足だけを洗う、つまり、日ごとの地上での歩みの中で汚れてしまうのを、イエス様の言葉によって清めていただければよいのですが、その前に御霊によって全身の洗いをしているから、関係を持つことができます。けれども、全身の水浴さえ行っていないのが、イスカリオテのユダでした。そもそも、主との関係を持っていなかったのです。弟子として、イエス様につながっているように見えて、実は心を主に明け渡すことがなかったのです。そういった者たちは、実を結んでいるようでいて、内実がないので化け皮が剥がれます。そして、終わりの日には父が取り除かれるのです。

けれども、実を結ぶ者には主は働きかけをなされます。もっと多くの実を結ぶように、「刈り込みをなさいます」とあります。けれども、ここの直訳は「清くなさいます」というものです。あるいは、洗ってくださるとも訳すことのできるものです。イスラエルでは、ぶどうの木からの枝は、ワイヤーなどでその上を這わせることもあります。あるところでは、枝が地面に横たわっていて、枝を地面に這わせることがあります。実が大きくなってきた時、実がよく取れるように、ぶどうの実を洗っていくのです。少し地面から上げて、洗浄し、泥などを除去します。これをおそらく、イエス様は言われているのだと思います。なぜなら 3 節で、「あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことによって、すでにきよいのです。」と言われているからです。御言葉によって私たちが清められることによって、より多くの実を結ばせることができるのです。ダビデが語りましたね、「詩 119:11 私はあなたのみことばを心に蓄えます。あなたの前に罪ある者とならないために。」

3B 「留まる」ことによる結実 4

4 わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。

主の命令は、「とどまりなさい」であります。それは、枝がぶどうの幹につながっていなければ実を結ぶことがないのと似ていて、何かを行うのではなく、イエス・キリストに留まることによるのみ可能なのだということです。「留まる」というギリシア語、メノウと言いますが、「一定の時間、同じところにいる」という意味です。ヨハネは福音書の中で何度となく使っている言葉です。40 回も出てきます。15 章だけで 11 回も出てきます。他のところでは、「泊まる」という言葉にも訳されています。弟子たちがイエス様から、「何を求めているのですか。」と聞かれた時、「どこにお泊りですか。」と尋ねました(1:38)。

ここから分かることは、イエス様との時間を取った関係が大事だということです。実というのは、自然に出てくるものです。イエス様との命の関係の中で、イエスの命が流れて初めて実のものです。ですから、ここで「わたしもあなたがたの中にとどまります。」と言われています。自分がイエス

様のうちに住んでいたら、イエス様も自分の内に住んでくださいます。その交わりの中で、イエス様が自分を通して働いてくださいます。実は、こうした命の関係の中で結ばれます。

けれども、ノルマのようにして、営業をしているか、あるいは工場で働いているかのように、クリスチャン生活を考えている人たちがいます。自分で何かをやってそれで実を結ばせようとするのです。けれども、幹につながっていなければ、どんなに振り絞っても、自分から良いものは生まれません。イスカリオテのユダのような人は、イエス様のために何かを行っていたかもしれませんが、けれども、本当には共に住んでいませんでした。心が離れていたのです。放蕩息子の喩えで、兄息子が父の家に住んでいたのに、父の心が分かっていたのと似ています。祈ります、聖書を読み、また教会で奉仕さえするかもしれませんが、けれども、それらが神の愛を知らずに行っていれば、実は一切結ばれないのです。

また、主はご自身を信じたユダヤ人たちに、このようにも言われました。「8:31 あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です。」ここでも「留まる」はメノウになっていますが、彼らは信じたのです。ところが、イエス様と議論しているうちに、ついに最後は、石を投げつけようとしてしています。主の言われたことに知的に説得されたのかもしれないけれども、主のことばを一定の時間、自分のうちに留まらせることはしなかったのです。信じると言っても、イエス様を継続して信頼するという、人格的關係がなければ、それは真実に信じたことになりません。

ですから、主のうちに留まっている人は、主が留まってくださいますので、必ずやそこから実が結ばれるのです。ですから、私たちは自分が何をするのか？ということに力を注ぐのではなく、イエス様をいかに知ること、いかにこの方に留まり、御言葉を留まらせるのに精力を注ぐ必要があります。

2A ぶどうの枝、弟子たち 5-8

1B 何もできない枝 5

5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。

主は、ご自身が木であることを強調していましたが、今度は、「あなたがたは枝です」と強調し始めます。枝そのものには、何ら力も命もないのです。枝というのは、幹につながっているからこそ、(大阪弁を使うなら)「なんぼ」であり、枝自体には価値がありません。ですから、「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」であります。ここの「何も」は、ギリシア語でも「何も」の意味です！全く何もできない、ということです。私たちは何かできると、どうしても思っています。クリスチャンとして、何もできません！と、劣等感に陥っているときは、まだなにかできると思っているから、落ち込めるんですね！何もできないことが分かる時は、落ち込むことさえて

きません。ペテロは、命をかけてもイエス様のお供をすると強く願ったのですが、あなたはイエスの仲間ですね？と問われただけで、「知らない」と言ってしまいました。

肉には善を行う力が全くありません。パウロはコロサイ書でこう言いました。「2:3 あなたがたはすでに死んでいて、あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されているのです。」自分は既に死んでいるのです。けれども、自分が生きているのは、もっぱら、キリストが自分の内に生きておられるからです。ですから、霊的には全く無駄なのが、「自分を磨く」ということです。土の器に、キリストの栄光の宝が入れられていることを、パウロはコリント第二で話しました(4:7)。

2B 投げ捨てられる枝 6

6 わたしにとどまっていなければ、その人は枝のように投げ捨てられて枯れます。人々がそれを集めて火に投げ込むので、燃えてしまいます。

枝というのは、つながっていなければ本当に他のことの役に立たないものです。ただ、燃やしてしまうこと、燃料にするしかありません。そしてこの火は、滅ぶことを示していて、火と池、永遠に苦しみのところ、地獄を表しています。イエス様は、何によって救われているのか、あるいは滅びるのかを明らかにされています。イエス様を信じ、この方に留まっているかどうか？であります。この方を知っているかどうか？であります。

3B 願いによる結実 7-8

7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら、何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになります。

主は、弟子たちがご自分に留まり、またご自身が弟子たちに留まる時に、多くの実を結ばせるのは、彼らが、「何でも欲しいものを求めなさい。」ということによって結ばれていくことを教えてください。願いによって、祈りによって、主は数多くの実を結ばせてくださいます。以前もお話ししましたが、これは、自分の欲するものを何でも手に入るということではありません。そうではなく、イエス様が父に従って、その中で願ったものが何でもかなえられたように、私たちがイエス様に留まって、イエス様のことばを留まらせている中で、その御心を願って祈るならば、何でもかなえられるということです。

ですから、私たちは積極的に願い求めることを、神から求められています。自分だけ堪えて何も言わない、遠慮するというのは、クリスチャンの姿ではありません。願うのです、イエス様は言われました。「ルカ 11:9-10 ですから、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれでも、求める者は手に入れ、探す者は見出し、たたく者には開かれます。」

そして、実を多く結ぶことによって、「わたしの父は栄光をお受けになります」とあります。そうです、主は私たちが実り多い人生を送ることを願っておられます。それがそのまま父なる神に栄光を与えることになるのです。

3A 愛に留まる 9-11

では、実とは何でしょうか？次にイエス様が語られるのは、父の愛、主ご自身の愛です。ガラテヤ書に、「5:22-23 御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。」とあります。御霊の実は愛だということです。愛の特徴が、喜び、平安などであり、愛が実です。イエス様は、13章と14章から、愛することについて何度となくお語りになり、その中で、もうひとりの助け主である聖霊が与えられることを語られました。神の愛に留まるにあたって、助け主、聖霊から注ぎが必ず必要であります。

1B 父の子への愛 9

9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛にとどまりなさい。

イエス様の弟子たちに対する愛は、父の愛でした。イエス様は、父に愛され、その愛を弟子たちに注がれていました。「3:35 父は御子を愛しておられ、その手にすべてをお与えになった。」その父が子を愛し、子がご自分のものとされた弟子たちを愛した、その愛に留まりなさいと命じておられるのです。ここにも関係性が強調されています。イエス様は、ひたすら父の言われることを、ご自分の力で聞いて行って、それで頑張るって、弟子たちを愛されたのではありません。それは、父から愛されているという安心感があり、その保障の中で弟子たちを愛しておられたのです。愛が流れ出ていくのです。同じように、私たちが互いに愛し合い、また隣人を愛するというのは、キリストに愛されているというその安心感があり、保障があって、それで自分をかなぐり捨てて、他者を愛するのです。父なる神から子へ、子から聖霊によって私たちに、そして私たちからキリストの愛が溢れ出るのです。

2B 戒めにある愛 10

10 わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっているのです。

無条件の愛を受ければ、必ず、その愛してくださった方の言われることに聞き従いたいと願います。愛されているものは、愛してくださった方に応答したいと願います。イエス様は父に愛され、父を愛しました。その愛は、父から聞いて、言われたことをそのまま行っていくことによって現れていました。愛の関係の中には、戒めを守るという従順が含まれているのです。自分の愛している人がいて、その人の願うことを必ずかなえたいと願いますね。そして、言われることならなんでもしたいと願います。

もし、「イエス様は愛しているけれども、戒めは守りたくない。それは大変だ。」というならば、それは本当にはイエス様の愛を知りません。あたかもその愛が条件付きのものであるかのように、自分の心を閉ざしているからです。自分のすべての、裸の姿を主に前に持ってきていないからです。いいところだけを見せているのかもしれませんが。どんなに醜い自分であっても、その闇があっても、それで主はそのすべてを受け入れてくださったことを知る時、その愛は原子爆弾のように、自分の中で爆発します。自分の全てが変えられるのです。

さらに、前回から話していますが、愛というのは、感情以上に、忠誠心です。どんなことがあっても、この方にはついていきますという忠誠心です。自分の都合に良い時だけ付き合い、そうでなければ自分のことを求めるのではなく、どんなときにも相手の益を願うものです。真実な愛は、このように安定しており、尽きることがなく、我を忘れるほどであり、喜びがあります。

3B 満ち溢れる喜び 11

11 わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。

イエス様がこれらのことを語られたのは、喜びのゆえでした。愛には、喜びがあるのです。そして、その愛によって戒めを守ることにも、喜びがあるのです。愛とは自分を捨てることです。自分はどこかに吹き飛んでしまうほど、自分がなくなります。イエス様には喜びがありました。その喜びで弟子たちを満たしたいと願われています。

聖書の語る喜びは、主との関係にある喜びであり、自分を捨てられているところの喜びです。自分というもののほど、自分を悲しませることはありません。その拘りから自由にされたら、なんと喜びに溢れることができるでしょうか。愛がそれを可能とします。自分を喜ばそうとすると、喜びがなくなります。けれども、主を自分の喜びとする時に、力が与えられます。主の喜びが自分の喜びになるからです。そして兄弟を喜ばそうとするその愛に、確かな喜びがあるのです。そして、弟子たちが喜んで、その喜びが他の人々にも溢れていくことを願っておられます。

弟子たちは、使徒の働きで、迫害を受けたのに喜んでる姿があります。サンヘドリンに連れていかれ、イエスの名によって語ってはならないと命じられ、それでむち打たれました。ところが、「5:41 御名のために辱められるに値する者とされたことを喜びながら、最高法院から出て行った。」とあります。私たちに喜びがあるでしょうか？どうか、主の愛を知ってください。そして、そこに留まってください。イエス様を知っていたはずだけれども、喜びが無くなっていたのなら、どうか悔い改めてください。そしてイエス様の愛に応答し、共に食事を取ってください。その愛に満たされた時、必ず喜びが戻ります。主の命令に従うところの喜びがあります。